No.428　　平成20年2月29日

杉五だより

杉並区立杉並第五小学校　TEL3392-6528

いよいよ二校の川が合流し大河になるとき

校　長　東海林　孝吉

地域の皆さんが学校を創り、支え、発展させてきた歴史と伝統ある杉並区立杉並第五小学校が、いよいよ81年間の幕を閉じるときが来ました。2月23日、杉並区長山田宏様を始め多くのご来賓や旧職員、地域や保護者の方々多数のご臨席を賜り、盛大に閉校式を挙行しました。

本校の特色を一言で言うならば「志を一つにした地域の学校」です。この天沼の土地に生まれ、また、生活した人々が杉五小をこよなく愛し、強い願いを子どもたちと学校に託した小学校だからです。

本校の歴史を振り返ると、今から91年前の大正6年に、天沼地区に初めて学校ができました。今の杉並第一小学校の前身である桃野尋常高等小学校まで通っていた1・2年生のために、蓮華寺の一部屋を借りて始めた天沼分校場。

そして、81年前の大正15年4月1日、児童数は311名で、6学級、先生は9名で、ついに誕生した東京府豊多摩郡杉並第五尋常小学校。

その頃ヒグラシの里と呼ばれた天沼村は、田や畑がたくさんあり、杉などの雑木林に囲まれ、今の日大二高通りは、荷車が1台通るのがやっとでした。

このような天沼地区に、たくさんの人が都心より移り住んで、町はどんどん発展。子どもの数も年々増えて、昭和9年度には、本校の歴史上最も多い児童数1538名26学級に膨れ上がった東京市立第五尋常小学校時代。

開校時以来の校訓は、「よく学び、よく遊べ」で、この校風が脈々と受け継がれてきました。

そして、長く苦しい戦争の中での戦時色の濃い授業や集団学童疎開があった杉並第五国民学校時代。

さらに、戦後の物不足や教室不足での二部授業、幾度か繰り返した校舎の増改築、そしてできた「ベランダのある学校」。様々な区内外の研究奨励を受け先駆的な教育活動を推進してきた杉並区立杉並第五小学校時代。

81年の間には、多くの苦難をくぐりぬけ、常に区当局、地域、保護者、同窓会の皆様に温かく見守られながら、総計12460名の卒業生を送り出すことになります。

営々と受け継がれてきた「誇りある心の故郷杉五小」への卒業生の思いは、昭和10年に発行された沿革誌ともいえる「校報第1号」に、森田弥一初代同窓会長が寄稿された文章に見事に表されていると思います。

『在校生は兄と呼び、卒業生は弟と呼んでいたわる心。学校を出た後までも慈父として敬慕する卒業生と、教え子の幸福を神かけて祈る先生、この喜びこそ私達にのみ味わい得る喜びではありますまいか。(略) 学校教育の目的は在校中の成績を上げる事のみに依って満足すべきに非ずして、教え子をして後日大成せしむるに在る。即ち我々卒業生の躍進こそ先生方の期して待つべきものなり』と。これらの言葉は地域、保護者の方々そして同窓会の方々がいかに志を一つにして、杉五小に愛着と誇りを持ってくださっているかの証です。

一口に81年といいますが、実に重みのある年月です。歴代の校長を始め、数々の教育実践の成果を挙げてこられた諸先輩そして、保護者、地域の方々そして区当局の方々が、学校を支え、発展させてくださいました。その汗と涙と努力と、そして何よりも杉五小を愛する心の絆の上に今日があり、並々ならぬご尽力に心からお礼申し上げます。

いよいよ杉並第五小学校・81年の歴史を閉じる時が来ました。しかし、それは、杉並第五小学校という歴史と伝統の川と若杉小学校という川が合流し、今まさにより広く深い『大河』にならんとする時なのです。それは、杉並第五小学校という名前は消えても、今まさに進化し、前途洋々たる21世紀の未来を拓き、人が育ち、人が活きる教育立区杉並、そして日本の未来を担う学校として『大河』になろうとするときです。

6年生は、杉五小の最後の卒業生。杉五小卒業生としての誇りと心の故郷を決して忘れないで巣立ってほしい。

在校生は、新しく生まれる天沼小学校の児童として、新しい校歌にあるように「いつも世界に眼を向け、杉の木みたいにまっすぐに心と体を鍛え、みんなで学びあう学校」を創ってほしい。

そして、天沼の地域を愛し、母校を愛し、子どもを愛する多くの先輩達に負けない立派な人間に育ってほしいと願っています。

・・・・・今月の目標・・・・・

生活の目標
「ありがとう」の言える子になりましょう
(一年間の反省をしましょう)

保健の目標
一年間の体のようすをふりかえろう

給食の目標
一年間の反省をしましょう